

同一個世界、同一個夢想（ひとつの世界、ひとつの夢） -- 二〇〇八年北京五輪（特集 南米初の五輪を開催するブラジル -- 五輪開催と国の発展）

著者	山田 七絵
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	250
ページ	28-31
発行年	2016-07
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00002914

同個世界、同個夢想（ひとつの世界、ひとつの夢）

「二〇〇八年北京五輪」

山田 七絵



写真1 開会式当日の夕方、人通りのない北京市内（筆者撮影、以下同）

二〇〇八年八月八日午後八時八分、その形状から「鳥巢^{ニャオチャオ}」と呼ばれた巨大な銀色の北京国家スタジアムの上空に、爆発音とともに色鮮やかな花火が打ち上げられた。五輪開会式の夜、北京の街からはお馴染みの風景——排気ガスを吐き出す自動車の列、行きかう人々——が消え、ガラシとした道路がやけに広く感じられた（写真1）。直前になって八日が休日になったこともあり、市民はもろろんタクシー運転手でさえも、テレビでこ

の記念すべき瞬間を目撃するため、早々に帰宅してしまったのである。この日から九月二〇日までのオリンピックとパラリンピックの開催期間、そしてそのずっと前の準備段階から、開催地の北京は高揚感に包まれていた。そして同時に、市民は後述するような当局の「オリンピック政治」とでもいえるべき動きに日常的に巻き込まれていた。筆者は直前の五月から海外派遣員として北京に一年間滞在する好機に恵まれた。五輪が中国社会にもたらした変化について振り返ってみたい。

●開会前夜

北京五輪は開会前から国際的な注目を集めていた。三月末に始まった聖火リレーはギリシャのオリンピックを起点にユーラシア、北米、南米、アフリカ（史上初）、オー

ストラリアの五大大陸で行われ、総走行距離は史上最長の一三万キロ以上に及んだ。

ところが、この聖火リレーの行く先々で中国の領土問題、人権問題に対する抗議行動が発生し、しばしば予定されていた走行経路や関連セレモニーの変更や中止を余儀なくされるという異例の展開となった。具体的には、聖火リレー直前に発生したチベット暴動への中国政府の対応に対し、ギリシャ、イギリス、フランスなど多くの国でジャーナリストや人権活動家が抗議活動を行った。一部の地域では抗議者による妨害が相次いだため、中国から派遣された警備チームがリレーに随行する事態となった。妨害活動が最も激しかった国のひとつであるフランスでは、多くの議員もチベット支持を表明した。中国国内では、こうした動き



写真2 ボランティアのスタンド

に反発した市民が一部の大都市でインターネットやSNSを通じてフランス系スーパーチェーンのカルフールの商品の不買運動やデモを呼び掛けた。これに対し中国政府が「秩序ある愛国主義」を呼びかけ、沈静化を図る一幕もあった。また、本来走行ルートに含まれていた台湾が台湾側の抗議によって四月に走行ルートから外された。

さて、開会前夜の北京の街はどんな様子だっただろうか。筆者が開会を間近に控えた七月末に記した報告書の一部を紹介したい。

「北京市内には、あちこちにボランティアスタッフが駐在するスタンドが設けられ、青いユニフォームを来たスタッフが張り切って活動しています（写真2）。オリンピックに向けて市内の商業施設

等の整備が急ピッチで進められてきたが、中央電視台ビルなど、間に合わない施設もあるようです。前門^{前門}近くの大柵欄街^{大柵欄街}ではレトロな町並みを再現するための工事が進められていましたが、七月下旬に報告者が通りかかった時点では工事が完成しておらず、物見高い北京市民が並んでシートの隙間から工事現場の様子を覗いている光景がみられました(写真3)。

一方交通規制やテロ防止のための警戒態勢も強まっています。七月二〇日以降一日おきに奇数と偶数のナンバーの車のみを通行させる『単双号行駛』が始まり、北京名物の渋滞もだいぶ緩和されているようです(写真4)。鉄道駅、



写真3 街中が完成予想図のシートで覆われた工事現場だらけだった

空港のみならず地下鉄駅でも手荷物検査が行われ、市内の大学は学生証等を提示しない限り立ち入り禁止となりました。」

北京を訪れる外国メディアや観光客への対応として、北京市政府は公共交通の整備や市民のマナー向上に力を入れた。地下鉄は大幅に延伸され、メインスタジアムのあるオリンピック公園への交通手段として地下鉄北土城駅から北へ四駅分延びたオリンピック支線という地下鉄線が新設された。街頭には「文明乗車」(文明的なバス乗車)、「文明観賽」(文明的な競技観戦)などの啓蒙的な標識があふれた。北京のタクシー運転手には揃いの黄色いシャツとネクタイの着用が義務付けられた。最初の頃は皆パリッとした様子だったが、日が経つにつれてネクタイが消え、シャツには皺が目立つようになっていった。なお、交通規制によって渋滞が緩和されたところがあるが、同



写真4 オリンピック期間中の交通規制に関するポスター

時期の北京市民の様子を記した参考文献①によれば、五輪関係車両の専用レーンが設けられたことによって交通規制の効果は相殺されてしまったとのことだ。

もうひとつ特筆すべきは、環境対策である。悪名高い北京のスモッグを改善するため、北京市周辺では交通規制、工場の操業規制に加えて大規模な緑化が行われ、そのためにロケット弾による人工降雨が実施されているという噂だった。実際、六月から七月にかけて数日ごとに滝の如く激しい夕立が降った。近隣の住人は「北京に数十年住んでいるがこんなに雨の多い夏は初めてだ」と語った。ある日新聞を読んでいたら、「昨夜北京市郊外で人工降雨ロケットを○千発発射」という記事があった。一連の対策は確かに功を奏し、当時の北京には近年まれにみるという美しい青空が広がっていた。

●北京の熱い夏

八月八日の夜、多くの市民は三時間以上にわたる開会式のテレビ中継にくぎ付けだった。開会式の総監督は映画監督の張芸謀が務めた。式典は二〇〇八台の電飾付きの古代の打楽器によるカウントダ

ウン、それに続く演奏者らによる「論語」の「^{とも}朋有り遠方より来る、亦^{また}樂しからずや」という来賓歓迎の唱和で封切られた。続くアトラクションは中国の悠久の歴史と文化、発明品(紙、活版印刷、火薬、絹、羅針盤など)をモチーフとしており、張監督らしいマスゲームやワイヤーアクションを多用した豪華な演出だった。

続く開会宣言のなかで、組織委員会の劉淇会長は一〇〇年前の新聞を引用しつつ、「奧運百年夢」(五輪開催は中国にとって一〇〇年越しの夢)と述べた。この言葉は公式スローガン「同一個世界、同一個夢想」同様、当時よく耳にした。アジアで夏季五輪が開催されるのは日本、韓国に続いて三回目であった。五輪開催は中国の悲願であり、過去数十年の発展ぶりを世界に誇示するためのまたとないチャンスだったのである。

最後に場内で中国人アスリートによる聖火リレーが行われた。最終ランナーは一九八〇年代の五輪で活躍した体操選手・李寧^{リ・ニン}がつとめた(現在はスポーツ用品メーカーの経営者として有名)。前走者から聖火を引き継いだ李寧が空中へ飛び立ち、そのままスタジアム

の内壁にぐるりと投影された絵巻物の上を一周し、聖火台に点火した演出には度肝を抜かれた視聴者も多かったことだろう。

世界中の観衆を圧倒した開会式であったが、後日様々な疑惑が呈されることとなった。冒頭で巨人が「鳥巢」に向かって歩いてくる演出があり、テレビ中継では巨人の(第二九回夏季五輪にちなんで)二九歩の足跡を模した火花が打ち上げられる映像が流れたが、最後の一步以外は事前に準備されたCG映像であったことが判明した。赤いドレスの少女による独唱は、実は別室で別の少女が歌っていたものだった。また、直前には開会式のリハーサル映像が韓国のテレビ局から流出し、後日組織委員会に謝罪するという騒動もあった。海外でどう受け止められていたかはともかく、元来議論好きの北京の人々は時に笑い、時に怒り、時にあきれながらも五輪談議に花を咲かせていたように思う。

北京五輪には二〇四カ国・地域の一万人以上の選手が参加し、二八競技三〇二種目が行われた。大部分の競技は北京市内の施設、一部は天津、青島、香港で行われた。連日中国人選手のメダル獲得



写真5 現時点のメダル獲得数ランキングと中国人メダリスト一覧

のニュースが報じられた。レストランなどの大型テレビに集まった人々が画面を食い入るようにみつめる光景がよくみられた。街頭のボランティア・スタンドでは、日々上位国のメダル獲得数が更新されていた(写真5)。最終的な金メダル獲得数は中国が五一で世界第一位、続いてアメリカ三六、ロシア二三となり、中国は合計一〇〇のメダルを獲得するという輝かしい成果を上げた。

筆者は知人経由で香港のある有名な企業経営者のVIP用観戦チケットを譲り受け、北京理工大学体育館で行われた柔道予選と「鳥巢」で行われた陸上決勝を観戦することができた。後者について、少し紹介したい(写真6～8)。



写真6 北京理工大学の柔道予選会場にて。谷亮子選手は危なげなく予選通過

まず驚いたのが、観戦チケットなしには五輪支線に乗車すらできないこと、警備が空港並みに厳しかったことである。ようやく会場に到着するとVIP専用の入り口に案内され、そこから赤い絨毯の敷かれた内部通路を通じて専用ルームに通された。中には飲食物を

出してくれる係員がおり、食べ放題・飲み放題である。競技場に面したガラス扉から観客席に出ることができ、すり鉢状の「鳥巢」全体の構造からいえば、観客席の二階部分をこのような部屋がぐるりと一周している。陸上競技は欧米勢が優勢で、北欧や米国の応援団が目立った。室内に目を転じるとレノボなど大企業の子会社と思しき子どもたちは飲み食い



写真7 「鳥巢」のVIPルーム内部

熱心に観戦している者はほとんどいなかった。この経験を通し、筆者は五輪観戦が庶民にとって得難い機会である一方、VIPにとってはありふれた娯楽のひとつしか過ぎないことを理解した。

このことについて、作家の余華は以下のように批判している。

「北京オリンピックの期間中、多くの生活の貧しい人たちが今日の中国の象徴である『鳥の巣』(国家スタジアム)や『水立方』(国家水泳センター)にあこがれ、(中略)地方から北京に出てきた。(中略)なかへ入って見学しようと思っただが、観覧券は売り切れだった。ダフ屋の切符は高すぎる。(中略)観覧券がないと『鳥の巣』と『水立方』のあるオリンピック公園に



写真8 観客席からみた「鳥巢」内部

は入れない。(中略)そのとき、競技が進行中の『鳥の巣』と『水立方』の館内には、多くの空席があった。しかも、空いているのは最高の座席ばかりだった。一部の別種の同胞、貴人や高官は最高の座席の切符を持っていた。(中略)彼らはポケットに入れたまま浪費される切符が、ほかの中国人にとっていかに貴重なものかを考えようとしな。また、衣食を切り詰めて北京へやってきた多くの一般庶民が、オリンピック公園に入れないことを氣遣うはずもなかつ

た」(参考文献②)。

●夢のあとさき

八月二四日の閉会式をもって北京五輪は幕を閉じた。厳しい夏の暑さが和らぐとともに開会前から街を覆っていた非日常的な空気が消え、まるで夢から覚めたように人々は日常の生活へと戻っていった。ボランティア・スタンドは撤去され、外国人観光客の姿は目にみえて減り、オリンピック支線は地下鉄八号線の一部となり、タクシー運転手の服装も元どおりならばらになっていった。もう少し後のことになるが、残念ながら北京の青空も徐々に失われていった。しかし、すべてが元に戻ったのだろうか。

五輪閉会後、華々しい祭典の陰で隠されていたいくつかの事件が明るみに出てきた。最大のスキヤンダルは九月に衛生部が発表した、メラミン(プラスチック原料として用いられる化学物質)が混入した乳幼児用粉ミルクによる中国史上最大規模の食品公害事件である。汚染された粉ミルクを飲んでいた乳幼児に六月以降腎臓結石などの健康被害があらわれ、国内外の最終的な被害者数は二九万人以

上、少なくとも六人が死亡した。事件の発端となった河北省の三鹿集団は倒産し、他の大手乳業メーカーにも捜査の手が及んだ。最終的に二二社でメラミン混入が確認され、関係者六〇人が逮捕された。捜査が進むにつれ、酪農家やブローカーが原料乳を乳業会社へ売り渡す際に加水による水増しを行い、下がったタンパク質含有量を偽装する目的でメラミンを混ぜていたことが明らかとなった。さらに国内外の消費者を震撼させたのは、これが当時の中国の乳業業界で半ば暗黙の了解であり、行政も黙認していたという事実である。連日乳幼児の健康被害に関する痛ましい報道が流れ、母親たちはスーパ

ーの輸入粉ミルクの棚に殺到した。以前から食品安全問題は取り沙汰されていたが、この事件によって人命よりも利益を優先した食品業界はもとより、五輪の大義名分のもと報道を遅らせた政府とメディアに対する消費者の不信感は払拭し難いものとなった。事件後、食品安全行政のみならず、政府や企業と消費者との対話のあり方は抜本的な改革を迫られることとなった。他方、五輪期間中北京郊外につくられた選手村向けの有機農

場は、後に国内向けの有機農業の礎となった。

中国初の五輪は、強い政府のイニシアティブのもと概ね順調に運営された。中国の繁栄を世界に示すという目標は達成されたといつてよいだろう。しかし、その強大な国力とは不釣り合いな五輪前後の様々な騒動から、巨大な発展途上国である中国が急速な発展のなかで多くの課題を抱えていることも明らかとなった。二〇一二年に就任した習近平国家主席は、中国经济がこれまでの高度経済成長期から持続可能な経済成長へ向かう「新常态」の段階に入ったと宣言した。一〇〇年の夢を果たした中国は、次にどんな夢を追いかけていくのだろうか。

(やまだ ななえ/アジア経済研究所 環境・資源研究グループ)

《参考文献》

- ①田原真司「『老百姓』たちのオリンピック」『日経ビジネスオンライン』二〇〇八年。
- ②余華『ほんとうの中国の話をしてよう』飯塚容訳 河出書房新社、二〇一二年。